

卒業生におくる言葉

「現代人」への問いかけ

湯浅 八郎

いわゆる学校教育の終点である大学卒業は、青春の終止符でないまでも、人生行路の重要な一目標であることだけは明らかである。卒業生諸君は、過去を顧み、将来を考え、各人各様の感慨に沈吟している昨今であろう。或いは透徹した人生観を確立し、自己の人生目標と方向づけをおえて心の落ちつきをえている人たちもある。或いは無氣力に常識の世界に終始して、惰性のままに、時流に棹さすことで満足している者も多かる。或いは造反運動の興奮から、今なお醒めやらぬ人もあろう。中にはその興奮からさめて、空洞化した主張の反省に、沈痛な悔恨の念をもつものも無くはあるまい。得意と失意、成功と失敗、知識と技術、同大生活の批判と評価は、各自が各自の主体性においてくださるべきもの。いづれにしても、聖書が啓示するように、誠に世はさまざま、人はそれぞれである。そしてそれが、神なくして救われぬ人間社会の実態なのではあるまいか。

しかし、問題はすでにとり戻せぬ過去ではない、現在であり將

来である。それも根本的には、原子力革命の夜明けに生をうけた現代人として、如何なる歴史観、世界観、人間観をわがものとしているのか。如何なる人生観や価値観にもとづいて、一度あって二度とない自己の人生設計をしようとするのかが問われているのである。そして、それは当然、卒業生一人一人が自問自答すべきものなのである。

私はここで、現代人をもって任じ、現代人らしく生きようとするわれわれに対し投げかけられている三つの峻烈冷酷な批判に言及して、諸君の一考をわずらわしたい。その第一は「現代人は時代遅れ（オブソリート）」であり、第二は「現代人は文字を知って、その意味を知らぬ（リテレート・バット・イグノラント）」であり、第三は「スローガンの奴隷」である。

現代人は時代遅れと喝破したのは、第一流の評論家ノーマン・カズンスであるが、今や人類が火力・水力・蒸気力・電力などの比較にならぬ絶大なエネルギー源、原子力を発見し開発し始めたからには、百五十万年に亘る人類進化史上、空前的に、文明は根本的に変革させられるであろう。したがって既存の体制、秩序、権威、慣行など一切のものが激変されるであろう。そしてこの革

命に適應しえないものには敗残者の運命があるのみというのである。現在、時をえ顔に横行している造反活動家たちも、その理念や感覺はすでに時代遅れの電気文明の所産に過ぎず、彼等が自負するように、真に時代の先端を切る革命の担い手ではありえないのではなからうか。第二の「文字を知ってその意味を知らぬ」は、知識の爆發時代に住むわれわれは、実に多種多様の新旧文字を常用しているが、果してそれらの真意を理解し味得しているであろうか。たとえば、自主性・主体性・人間性・正当性、未来、原点などについて。第三は、情報過剰な社会に横流する無数のスローガンに大衆は、それらの妥当性や信憑性を検討批判する能力も余裕もないままに、他愛もなく誘惑されたり威嚇されたりしがちである。しかも実践も実効もスローガンそのものにはありえないのであるから、どれほど立派であり魅力的であろうとも、スローガンは無意味、無価値に等しいものである。時には有害でさえありうる。何故ならスローガンを叫ぶことを実践と錯覚しやすいから。実例はいくらでもある。たとえば、平和・自由・人権・平等・幸福・正義・科学・宗教・民主主義、等々。このスローガンに支配せられ左右される現代人の頭の働らきを、私はスローガン・メンタリティとよぶのであるが、このメンタリティからの解放こそは、大学卒業生に寄せられる期待の最大のものかも知れぬ。

それほどスローガンの毒害は大なのだから。しかし同大卒業生には、更に一層厳肅な期待があるはずである。それは聖書の啓示にもとづく歴史観であり、人間観であり、価値観であるが、諸君は、これをどのように自問・自答されるのであろうか。(明治四十一普卒・同志社評議員議長、元総長、国際基督教大学名誉総長)

国際的同志社人の輩出を

原田 健

このたび母校の各校から、めでたく卒業される諸君に対して、小生は校友の一人として、心からのお祝いを申し上げたいと思います。実は昨年の事件で、或いは諸君のなかには将来のキャリアに影響するのではないかと、ひそかに案じた者もあったでしょうが、幸いにそのことなく終ったことは、何より慶びに堪えない次第です。

小生は明治の最後の年に、普通学校(旧制中学)を卒えて一身上の事情から官学に奔った者ですが、由来私学ではその出身者等が献身的に経営の任に当るのが常であるのに反して、官学では政府や下部機構が万事を賄って呉れるから、どうしても自分自身の学校だと思えぬことを始めて知って、今更のようにほんとうに自分の学校、しかも生涯を通じて同志社の如き母校を持ち得た幸福を痛感したことは、かつて本誌上でも告白した通りです。このたびひじょうな幸福を持たれんとする諸君に対して、この意味からもお喜びを申しあげねばなりません。

米国の学校の大部分は私学で、それが官学よりも遙に優秀であるが、今日の大をなした背景に私学出身者の母校に対する多大な寄与の存することは銘記せねばならないことです。

同志社をわが母校として持ち得る幸福と申す理由は多くありますが、その主な二、三を挙げれば、何の主義精神もない所謂「学

読書の習慣をひげよう

千田民衛

校屋」に経営される学園とは大いに異なり、わが母校には真に誇るべき校祖が建てられた確乎たる興学の精神が存することです。母校は申す迄もなく基督教主義の学校ですが、宗教のことは個人の信念にかかるとは、仮にしばらくこれをおいても、その立学の根本精神に基督教に淵源したデモクラシーの精神があることは間違いないと信じます。現に校祖新島先生は十年間、アメリカン・デモクラシーの本場で研さんを積まれた上、正真正銘のデモクラットとなつて帰朝されて、その主義精神に基づく学園を設立し祖国の将来を救わんとされた一大愛国者でした。ところがデモクラシーの無理解や行き違えに原因すると思われる、今日この頃の憂うべきわが国の現状を想うときに、何の幸いか創立以来デモクラシーを校是とする母校で育てられた幸福を持つ同志社人の、日本の真正な民主化に対する責務の重大なことを今日ほど痛感させられることはありません。

わが母校は所謂ミッションスクールとは違つて、歴とした日本の一大先覚者を校祖にいただいてはいますが、創立以来今日迄、米国内の絶大の援助に浴しただけに、同志社の国際性の強いことは、国際親善に貢献した幾多著名の先輩方を輩出した事実によつても判ります。世界が日一日と小さくなり、益々国際化せんとする今日、往々エコノミックアニマルとか「醜き日本人」とかの悪評を蒙むる折柄、小生の切に祈願するのは諸君が国際的同志社人として、日本の国際的地位の向上に精進されることです。ひとえに諸君の今後のご成功を祈りあげつつ。

(明治四十五普卒・同志社評議員、元駐伊大使、前式部官長)

内ヶ崎作三郎氏は次のようにいっている。「およそ、人は読書によつて大なる影響を受ける。読書は智徳の門であつて、文明の鍵である。人生の修養は読書の知識に始まつて、日常の躬行に至つて成就する」と。

読書が人生にとつて如何に必要であるかは明らかなことであるが、また読書が人間の生活において如何に至難事であるかも明らかなことである。三木清氏は「人間は読書の習慣をつけることが生涯を通じて一番大切なことだ。それも青年時代につけておくこと。青年時代に読書の習慣をつくらなかつた人はおそらく生涯を通じて読書の面白さを理解しないで終るだろう」といっている。まことにその通りである。学生時代は余儀なく読書をかさねているが、学校を卒業して社会に就職し、家庭をもつようになると、読書を放棄してかえりみない人が多い。私はオール同志社の卒業生諸君に読書の習慣をつけて生涯これを守ることがすすむたい。

読書にもいろいろある。第一に必要なことは、職業上の知識や技能を持つことが、その仕事を完全に遂行するために必要である。この知識と技能があるか否かによつて、日常の仕事に興味と熱意をもつて豊かに勤めるか、さく漠として過ごすかの別となる。また仕事の出来、不出来にもあらわれる。私は諸君が最初の給料をもらった時は、必らずそのたずさわる業務に関する本を買

うことをすすめたい。第二に必要なことは、「心の糧」として古典を読むことである。古聖賢の遺訓は後世にまで伝わり教化を与えている。古人は古典をもって人格陶冶の金科玉条となし、これを聖經とよんだ。しかし今日、世人は古典を知らない。したがって、質実重厚な修養を試みようとする者もはなはだ少ない。

同志社の先輩・徳富蘇峰先生は、「読書九十年」という本を著したほどの読書家であるが、次のようにいっている。「自分がいかなる場合でも頼りになったのは、学生の頃、新島先生に教えられた聖書、それに父に教えられた論語だった。終戦の時などずいぶんさびしい思いをしたけれど、それを慰めてくれたのは人でなくこの二つの書であった。本は一生をつれそう女房のように、朝晩離さず少しずつでも読んで一生を通じての伴侶、よりどころとするがよい」と。聖書と論語は古典中の古典である。これを読んで人間形成の基本とせよというのである。ある人は、徒らに浮薄軽佻な週刊誌などを求め、悖徳、汚辱的な記事に興味をおぼえている。これは、現在の風教が頹廢している主な原因であって、全く古典修養の欠けているところと思う。古典は聖書や論語のような硬いものとは限らない。源氏物語でもよい。また、古典を讀んでその内容を記憶せよとはいわない。読んで感動すれば、古典を読む目的は達せられたと考える。

最後に読書の仕方には精読と乱読とがある。さらには、とはし読みも「つんどく」もある。私は精読がよくて、「つんどく」が悪いとはいわない。少しずつでも読んでいううちに、また親しんでいるうちに良書を精読することに心ひかれるものと信じるからである。

(大正二、大神中退・同志社理事)

いへんやう、しんじゆんものは幸なり

川北貞一

卒業生におくる言葉というと殊にそれが先輩から後輩におくる言葉となると、教訓めいたことになり、とおり一遍の面白くない言葉になったり、老の繰言になる危険性が非常に多い。私はこの危険からのがれようと試みた。しかし読み返して見ると、矢張りこの通弊に陥入っているの感が強い。

思えば私が卒業したのは、大正十四年（一九二五年）、今より半世紀近く前である。現在は学校別・学部別で卒業式が栄光館乃至中学のチャペルで行なわれているが、当時は全同志社の卒業生が一堂に会し、中学のチャペルで挙行せられた。総長は海老名弾正先生で、LLDの紅色のガウンを着用し、銀鈴を振るような莊重な美声で、告別の辞を述べられたのが、尚耳の奥深く残っている。当時は三十年前の卒業生が新卒業生に送別の言葉をおくるのが例になっており、三十年前の卒業生・中年を過ぎた紳士が祝辞を述べられた。要約すると、「従来の同志社の卒業生は、金または銀たらんと志した人が多くあったが、志なかばにして失敗している例が多い。金または銀たらんと志すことは勿論悪いことではないが、それよりも鉄たらんと志すのが適當ではないであらうか。鉄は世の中に数多く存在し、金または銀に比較すると価値の低いものであるが、有用な金属である。数量が多い価格の低い金属たらんと志すことは、自尊心を傷つけられるように思われるかも知

れないが、価格が低くとも、数は多くとも、世の中に役立つ有用な人物たらんとすることは、有意義な、しかも重要なことではないであらうか」

以上の言葉は、私は至言であると思う。故に私は、同じ言葉を先ず第一に卒業生に贈りたいと思う。

次に私が卒業生に贈りたいのは、私が同志社で学んで何を得て卒業したかと言うことを申し上げて、いま卒業する皆様の、これから末長い人生のご参考に供したいと思う。

一、良き友を得て卒業したことを第一にあげたい。私は卒業後、鴻池銀行（現在の三和銀行）に就職し、定年退職後、志をたて公認会計士・不動産鑑定士等の試験を受けて、まぐれ当りにも幸い合格し、現在これらの職業で生計を立てているが、卒業後現在まで、銀行在勤時代も現在の職業のときにも、同志社在学時代の良き友人から物・心両面から大きなプラスを得ている。拡大解釈すれば十万を超える校友は良き友人であり、味方である。千万人の味方との言葉はよく使用するが、我々同志社の卒業生少なくとも十萬の味方を得て卒業したと言うことができる。しかし、自己の行動・心持ち如何によって、これらの卒業生が味方でないこともあり得、または時により敵であることもあるということに注意しておく必要がある。

二、次に私は学問的に何を得て卒業したかと言うことである。

私の現在の職業は専門的な知識を要する職業であるが、これらを同志社在学時代に習得したかと言えば、専門的知識を習得する基本的態度は教えられるかも知れないが、然らずと答えるのが当を

得ていると申すことができる。

然らば何を得て卒業したか？ 人生に対する考え方を——しかも確固たる考え方を習得して、卒業したと自信を以って断言することができ、しかもこの考え方が卒業後約半世紀に亘る私の人生を支配したと申しても、決して過言でないと思う。

私の在学当時には、精神講話という課目があった。海老名隼正総長や竹崎？宗教主任が担当であって、主としてキリスト教的な考え方の話しをせられた。これらの先生方が何を話されたかの詳細は忘れてしまったが、只、海老名総長が毎回毎回繰り返えし話しの最後に「うるくるより、与うるものは幸なり」との聖書の言葉が話されたのが、私の記憶に強く残っている。当時、この聖句が何を意味し、人生を渡る上において、どんな意味をもつかは明確に理解できなかつた。一見、矛盾しているかの如く見える——ごく通俗的に巧利的に理解すれば、利益をうるより損失をした方が幸いである——この聖句はかみしめればかみしめる程味のある言葉であり、理解すれば理解する程、奥深い幅のある言葉である。

例えば、何事をなすについても、自分のことよりも相手の立場になって行動し、考えるならばすべてが円滑に運び、終局において自己に廻り廻ってくる。換言すれば相手に感謝せられ、自分が幸いとなる。また、同志社校友十萬ほとんど全部が味方となるばかりでなく、世の中の人間全部が自分の味方となる。この聖句の真髓を体して行動するならば「千万人と言えども吾ゆかん」との勇氣をだす必要もなく、すべてがスムーズに運んでゆくのではないだろうか。最後に、「うるくるより、与うるものは幸なり」の聖句

を卒業生諸君におくりたいと思う。

「同志社創立百周年」のときは私の卒業後五十年のときに当てる。その時は半世紀前の卒業生として、許されるならば、卒業式または記念式典に大体以上のことを申し述べたく、かねがね思っていたが、卒業生におくる言葉を求められたので、とりあえず申し述べることにした。(大正十四年高商卒・同志社理事、同志社評議員、公認会計士、不動産鑑定士)

「われ、この一事を努む」

五十川 団 一

青年の特色は、若さにあり活力にあり、純粋な行動力にあり、非妥協の精神にあります。非妥協とは節を曲げない志のことです。軽々しく妥協し、平然と節を屈する若ものの姿ほど世にみにくいものはありません。

みなさんは、長い人生のうち、今こそもっとも美しい心とからだをそなえた若ものであります。老醜のわれわれの目から見て、まことにうらやましい限りとしか申しようがありません。どうかこの美しさを一日一刻でも長く保ちつつけていただきたいと思えます。かりにも、おのれに妥協し、おのれの節を曲げることによってこの美しさがそこなわれることのありませんように、老骨の

先輩は心からお祈りする次第でございます。

みなさんの大部分は、これからそれぞれの会社に就職され、社会人としての第一歩を踏み出されるわけであります。大財閥系列に働らく方もおられるでしょうし、「牛後タランヨリハ鶏口タラン」と志してあえて中小企業を選ばれた方もありましょう。ただ、いずれもそれは、今後のあなた方の生活の場であり、錬磨の道場であり、時には生命を賭すべき戦場であります。断じてレジャーや息抜きの場合であってはならないのであります。聖書にある「われ、この一事を努む」という言葉が私は大好きです。自分の置かれた立場を自覚し、愛し、ひたすらその一事にのみ努める姿にこそ人生の美しさが見とれます。妥協屋の交節漢はこの「一事を努める」ことが不可能であります。

世に「倦怠期」という言葉があります。普通、夫婦生活の機微について使われますが、大学を出て職場に就き、二〜三年もすると、職場に対する倦怠感が必ずやあなた方をとらえるでしょう。これは人間成長の一過渡現象であり、少しも気にすることはありません。問題はこの倦怠期をどうやって克服するか気構えであります。「一事を努める」の気魄に欠ける安易な精神の青年は、ここでやすやすと誘惑に乗って別の職場に色目を使ってみたり、ありませぬ能力を過信して一仕事もくろんでみたりし、結局すべてに失敗して貴重な一生をフイにしてしまいます。

この時期におけるあなた方は、すでに親のスネをかじっている学生ではなく、立派な権利義務を持つ社会人なのです。社会的責任を負っている身なのです。この責任からも、軽々しく行動する

ことは許されません。

たしか伝教大師でしたか「一隅を照らすもの、これ国宝なり」と申しております。あなたはこの時点においては、すでに世のため人のため、あなたの守備範囲である「一隅」を、あなたの実力によって照らしつつあるのです。

会社に認められようとか、世に栄達しようとかいう考えは中年者に譲りましょう。青年は「一事を努める」純粹さと「一隅を照らしている」誇りで、堂々と胸を張って社会をつき進めばよいのです。この堂々たる態度こそ、あなたの明るい将来を約束してくれるでしょう。

(昭二入会・同志社評議員、京都府会議員)

寛容とファイトを

田 島 弘 一 郎

「我々は……安保は……反動政府が……だから……しなければならぬ……のである」キャンパスで、駅前で、公園で、メガホンを持った学生が、短く切った言葉をガナリたてている風景をよく見かけるのが、今日この頃の世相である。彼等の多くは他人の意見を聴く耳を持たず、自分の意見のみ押しつけようとする。現代は言論の自由が保障されているので、若い世代は益々饒舌をふるい、老いたるものは口をとぎしがちである。傍若無人の若ものふるまいに、おとなたちは腹にすえかねる思いをする場合が屢々ある。だがもし、憤りを口に出したり若ものを批判

したりしたら、ここを先途と攻めたててくる。ほんとうは若い世代の挑戦にこたえて納得づくの話し合いを進めていくことが必要なのだが、あまり性急にガナリたてられるとつい面倒くさいので、当たりさわりのないゴマカシで済ましてしまう。実はこの累積の爆発が、昨年の大学騒動でもあった筈だが、世代の違いと言うか、新旧思想のくい違いを埋めることは容易ではない。

右にあげた学生生活動家の演説の内容の空疎なことは、彼等の仲間以外には立ち止まって聞き耳をたてている者が殆んどいないことと明らかであろう。大学では毎日貴重な講義を聴講し、自分の量の知識を吸収している。だが、吸収するのに急で、それを咀嚼し我がものとする余裕はない。毎日次々に新しいものを注ぎ込まれるからだ。身につけていない知識は説得力に乏しく、前に述べたショートセンテンスの演説になってしまう。実社会で色々の場面に遭遇し、自分の貯えた基礎知識に不断の勉強と鍛錬を加えて、初めて応用能力の備わった教養となるのだ。去年の全国に吹きあれた大学紛争の中から出てくる今春の卒業生の中には、或いはおとなに失望し、教師に尊敬を忘れ、懐疑の念を抱いて実社会に一步を踏み出す若ものもあるかと思ひ、敢えて「あなたがたの吸収してきた知識は基礎知識に過ぎないもので、未だ応用能力には欠けているのだ」との苦言を先ず呈したい。

しかし、私は勿論諸君を去勢しようなどと思っていないのではない。世の中を改革し進歩させるのは、いつの時代でもヤングパワーである。おとなはとかく惰性に掉さしがちだが、理想を追求する青年は常に変化を欲し、現状に満足しない。今のおとなも青年

時代は皆、改革論者であった。だから旺盛なファイトは堅持し、困難に遭遇した時も不屈の魂で乗りきって貰わなければならぬ。そして公徳心のみなきった住みよい社会を常に志していたきたい。同時に年長者の意見には経験に裏打ちされた尤もな議論もあるかも知れないと、一応は謙虚に聞く寛容を忘れないことが必要ではないだろうか。協調の精神のないものは地域社会からハジキ出されてしまうことがある。

良心を手腕に運用する丈夫として世の中へ出る諸君に、私は「寛容の精神」と「くじけないファイト」を持って飛び出して来て欲しいと思う。

＊

京都には大学記念会館・新島会館・校友会館等があるが、大阪・東京にも夫々「同志社倶楽部」がある。倶楽部は同志社卒業生の憩いの場であり、団らんのある場である。ここで母校の情報を知り、校友の消息が得られる。特に、東京・大阪に就職した方々は、何をしておも先ず倶楽部へ顔を出し、毎月の「クラブだより」や「同志社タイムス」・「同志社時報」等を手に入れる手続をしていただきたい。今の世の中は他を顧みる暇のないほど、生存競争におくれをとらないよう、神経をつかう大変な時代である。意志の弱いものはノイローゼになってしまう例が多い。孤立では心細い。同志社人が手をたずさえ、互いに助け合いつつ前進するところに、必ず成功の彼岸があると信ずるものである。

(昭10高商卒・同志社理事、同志社評議員、・日東不動産株式会社社長)

いつも母校のそばに

小林喜代

「春のしらべの鶯よ……」と、つつましくかに奥床しいコーラスに送られながら、八年の間お世話になった校舎で卒業の礼拝を終えてからもう永い年月が過ぎましたが、その後ずっと京都で暮らし「母校のすぐそばに」生活してきた私には、この春また大勢の後輩の皆さんをお迎えしても卒業以来引続いて母校の中にいるように思えてなりません。昔ながらの京の街に建てられた校舎と、伝道の書を日本の徳目にあてはめたような教育と、新島先生の遺風も手伝ってか、ある程度、武士道の匂いの残っていたのが私たちの頃の雰囲気でした。今、皆さんの学ばれた母校は、はるかに広く明るく伸び伸びとした学校でした。日本中のどの職場にも大勢の先輩たちが居られ、先輩たちによって作られている多くの社会が、皆さんを迎えてくれることでしょう。日本全体が同志社によって組織されているようなものです。その上、同志社は昔からインターナショナルな点において、他から羨やましがられる存在でありました。新島先生の「播きたまいたいとも小さき」母校は多くの試みに堪え「地のはてまで枝を張る樹と」なったのであります。卒業といっても今までのクラスメートから離れて、もっと広く豊かな意味でのクラスメートに迎えられることになるわけで、初期の先輩方には思いもよらない幸福な社会生活に恵まれることでしょう。

ニカイア会議の教父たちには、キリスト教の公認された当時の世界が、地上の天国と感じられたそうですが、母校百年のいない手たちは今、皆さんを前にして涙を禁じえないことでしょう。

英語の一月という語が前向き・後向きの両面に關するようになり、卒業の語もむしろ社会への一步を印象づけるかのようです。カレッジソングに繰りかえされる育ての母親というラテン語(アルマ・マター)の意味する母校に、皆さんはすべてを負っているのです。職場で皆さんの得られる給料は職場からの給料ではなく、母校からの給料です。私も給料の何割かを母校に寄付すべきだと主張してきました。ただ、実行がともなわないだけです。皆さんの社会生活と結ばれている母校とは、プロテスタントの信仰です。シューベルトのミサは、なぜカトリックのミサと違った気分をただよわせているのでしょうか。面倒な理屈の儀礼でなく、信仰と行為だけが要求されるからです。

最後に、今後京都でお過ごしにならない方々も、人生の一時期をこの伝統の都で過ごした思い出の玉手箱をお開けにならないように。幸福の日々に多くの輝きを添えるのも、不幸な日々に慰めと励ましを与えるのも、母校の信仰による愛と希望とです。

歴史家・ランケは、どんな時代も神の「すぐそばに」あると言ったそうですが、今後の皆さんの社会生活の毎日毎日が、母校の「すぐそばに」あるよう祈っております。

(大一二普・大一五専卒・同志社評議員)

学園を去らんとする人へお願い

岸田敏馬

卒業おめでとう。

在学中は多事であった。それだけに貴い体験を経たことになり、凡々と学生生活を卒えるより幸せであったと思う。

同志社で学んだことは多かつたと思う。今、学園を去られるに際して、実行していただきたいことを二、三お願いしよう。

その一つは、キリスト教を教育の基本としている同志社に学びながら、教会にまだ行つたことがなければ、近い日曜日に教会で聖なる一日を過ごしてもらいたい。この一日は、長い人生でこの日のあったことを喜びとする時が必ず来ると思うからである。そして、その日に持参した聖書と讚美歌集を同志社在学の最高の記念品として大切にしてほしい。

第二には、卒業式をおえた日に「お蔭様で大学を無事卒業しました。大変有難うございました」と、父や母に感謝の言葉を捧げてほしい。心の中で誰しも思いついても、襟を正して言葉や文書で示すことは相当な勇気があることである。然し、この勇気は実社会では平気で行なわなければならないことである。この感謝の心こそ、社会生活の基である。

第三には、身体検査を精密に信用ある病院で行なってほしい。これからは身体を資に活躍しなければならない。今まで自分は病気をしたことはないとか、保健所の簡単な診断では何ともなかつ

たとかいって自信を持たず、自信をもって大いに活躍するために所謂「人間ドック」入りをする覚悟で、総ての検査を受けておくべきである。完全無欠な人は非常に少ない。如何に秀才でも如何に能力者でも、健康でなくてはその実力は發揮出来ない。健康こそ、総ての基である。

第四には、学園を去る日までに心を新たにしてお、図書館東の「新島遺品庫」(編集部注)現在、整理中のため閉館されており(ます)を訪れて、先生の遺徳を偲び、同志社が設立された由来や、新島先生が如何に同志社で苦心されたかを学んで、正門前の良心の碑文「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らん事を」を心読してほしい。

最後に、卒業されてから後のことでお願ひしたい。卒業すれば同志社とは何の関係もないが如くに離れることなく、三カ月に一度、少なくとも六カ月に一度は母校を訪れてゼミの先生とか、クラブの先輩とか、特に在学中に御指導を受けた人を探ねて近況を報告し、鞭撻や教示を受けられたい。これらの人は貴方の成功を祈っている人であるから、ある時は鋭く叱られることもあろう、また思わぬ恩情を垂れられることもあろう。何れにしても正しい道を教えてくれ、特に悩むことについては親身になって考え、正しい判断を下してもらえないにちがいない。先生や先輩には、ひたすら頼るがよい。

筆をおくに当たり、卒業を心からお祝い申し上げ、将来の多幸を祈念します。(昭五高商・昭八大経卒・同志社評議員、関西テレビ放送取締役)

心の豊かさ

園 四郎

明治維新以来、日本が近代国家として自力發展した原動力は何か。また、太平洋戦争の敗戦と荒廢した国土から、わずか二十余年にして今日のような豊かな工業国に發展した原動力は何か。これには幾多の基本的な要因はあったが、一には日本の精神風土にあった人間の力であった。

一九六〇年代は高度に經濟が成長した反面、この成長過程から生じた歪みとして、經濟的には恵まれても人間疎外をもたらし、人間の尊厳さを全く忘却し、世代の断絶の風潮が広まり、価値観の相違から社会的良心、秩序は無価値となつて精神的窮乏のドンドン底に陥ち入り、遂には既成の体制を批判し破壊する、大学紛争の悲劇が発生したことはご承知の通りであります。

今や、我々にとって最大の関心はもはや体制論ではなく、現実生活する人間一人一人が經濟的にも、人間的にも豊かになつていける社会、生き甲斐を感じ充実した人生を築いてゆける社会を作るために、どうしたらよいか、技術革命がもたらさずであらう新しい社会を、そのような社会として築いてゆくために、何をなすべきかということを考えるのもまた、人間の力であります。

それゆえ、現在の自己・社会・經濟の実態、それをもたらし技術革新の歴史的な意味を正しく理解反省することが、輝やかしい人間社会を創造することになります。変化する社会發展の中にお

いても、生きる主人公としての人間の尊厳は変化しないものであることを、我々は知るべきである。

批判には反省を、破壊には建設を求め、かたよった考え方や、行動を是正すべき変革進歩の一九七〇年を迎え、社会人として新たに職場生活にはいられず皆さん方に申しあげたい。人間は誰しも幸福を、また、どうして最良に生きるかを求めているものである。

職場生活では職能者（働らき手）という面と、尊厳な生活者（生きる目的の主人公）という面があり、従来、ややもすると前者が強調され、後者が軽視されていたのではないでしょうか。一人の生活者にとって、職場とは何であるか。①友人・先輩・指導者・生涯の親友・伴侶・未見の我（自分の中には自分の知らない自分があり、己れにもこんなことができるのか、という力）等々、自他に潜む無限の種子との出会いの場所であり、②遅れず・休まず・働らかざるの「三す哲学」で働らるか、または創意と努力・生命充実感が期待され、喜んで働らくかの選択の差はあっても、いずれも働らききの場所であり、③単に生きるだけではなく、より良く生きる価値と生き方を探求する場所であるといえます。

この職場において、生活者同士の相互信頼と扶助の精神、相手方の美点凝視、同一目標と仕事への情熱、暖かいグループ意識と協力をもってする人間的結びつきは、明朗な働らき甲斐のある職場作りともなり、或いは魅力ある人間作りともなるでしょう。このことを知るといふことは、自分本位の心の貧しさや優越感からの脱皮となり、人間の基本的な要求である愛情・成就・所属

・独立・経済的安定・社会的承認・恐怖侵害からの解放を人間同士が充たし合い、継続することによって、仕事を通じ社会に役立つ、他に迷惑をかけない人間としての生き甲斐を感じ、人間共通の心の喜びを分かち合うこととなって、ひいては、これが人間の尊厳・幸福に連なるものではないでしょうか。

この心の豊かさを持ちとすることは、諺にある「言うは易く、行なうは難し」の通り至難の途ではありますが、人間としてやらねばならない命題であると考えるのであります。この心の豊かさを具現する努力が新島先生の遺された言葉「良心の全身に充満する丈夫」ということや「良心を手腕に運用する」人にも通ずるものと確信するのであります。

最後に、皆さん方のご健康とご発展とを念願して止みません。

（昭和九年大経卒・同志社評議員、同志社連合父兄会長）

真の改革者たれ

田 中 伊佐久

同志社に学んだ後に官立の学校に行ったある学徒が、大学問題の激動の中で、今にして自分が同志社に学び得たさいわいをつくづくと思う、と述懐していた。紛争にある大学の中には多くのセクトがあることは共通であるが、しかし同志社には究極的に帰るべき礎があると言っているのである。

私は「卒業生におくることば」というむずかしい課題を与えら

れたのであるが、その心に深い傷をもって、学窓をとまかくも出で行かんとする卒業生諸君に言うべき言に苦しむ。しかし、このような時代には始めに帰り、礎に戻らねばならぬ。生きることの意味を真剣に考え、正しい生き方が何かということを求めねばならぬ。軽薄な思想や行動はやがて霧のように消え去るものであるから、それらに身を委ねて滅亡におちいらぬよう注意すべきであろう。

さて、この大学問題の激浪の中に巖の如く毅然として、なお動くことのない礎はどう考えてみても新島襄である。周知のように、彼は「洗礼を受けた吉田松陰」といわれている。彼は時代の先最端を突進した若き改革者であった。彼は列強に学ばんとして国禁を犯して渡米したが、神と出会うことによって世俗の野心を棄て、わが国民をして真に良心を重んじ、自由に立つものたらしめようとしたのである。「良心の全身に充滿したる丈夫」、これこそ彼の教育の目標であった。

私は学生の頃たった一度、日本救世軍の創立者・山室軍平中将の説教を、同志社「栄光館」で聴いたことがある。もう彼の晩年であったが、彼はその際、自分の青年の話しをした。彼が新島襄を慕って同志社に來たり、夜半に新島邸に挨拶に赴いたとき、新島はその黒い目で山室青年をみつめて、「君はまだ若いから、しっかりやりたまえ」といわれたということである。この時は山室が新島に、その生涯において会った、たった一回の面接であり、たった一度聴いた言葉であった。しかし、「この新島先生のお言葉が私の中に今も生き、今も私を動かしている」と彼は言っ

ていた。東京で印刷屋の小僧をしていた山室が、徳富蘇峯の演説を聴き、「京都に新島襄なる人物がいる。彼に一度会えば、一週間はすがすがしい。彼こそ紳士である」という言に動かされて同志社に來た山室と、新島の出会いはこのようなものであった。

自由を求め、革新をもたらさんとする善意ある運動も、単なる人間的イデオロギーに立つものは、やがて分裂を重ね、同時に倫理的エネルギーを喪失する。同志社は若き改革者・新島襄が神を仰ぎ、永遠に基づいて創立した学園である。果して今日我らの同志社会学園に彼の信仰に基づく改革的生命があるであろうか。先ず役員が、教授が、そして学生がこれを反省して改革者・新島に学ぶべきであろう。「君は未だ若いから、しっかりやりたまえ」と新島が青年・山室軍平にいったその言の意味は何であろうか。それを「良心の全身に充滿する丈夫」たれとの意味と受け取って誰が否定できようか。同志社会学園を卒業されんとする諸君よ、この困難の時代に、やはりこの新島の言をもって戦い抜いてほしい。

(昭十四年大神卒・同志社評議員、京都丸太町教会牧師)

熟慮と情熱を…

一 岡 た み

ご卒業おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。ご自身はさることながら、ご両親はじめ、ご家族のおよろこびもひとしおと存じます。

受験地獄といわれた難関を突破して入学なさったあの春の日のことももう遠い過去の夢となりましたね。それから友人と共に学び、共に遊んだ思い出も、友人にもいえない問題に悩んだ思い出も、つらかったことも、うれしかったことも、今はもう見果てた映画のシーンだけになってしまいましたね。大学の方の場合は昨年は異常な体験をなさったわけですが、その中で、あなたは羨らぬ温かいご指導を、あなたの先生から受けられましたか。それとも友人と徹夜の討論の中で何かを得られましたか。大いに活動にも参加されましたか。いずれにしても、あなたはあなたなりに得たいものを得られたに違いないと信じています。

明日からあなたが身を置かれる世界は、囲いのない大空のような、こんな自由なところははないといえはその通りの所ですが、しかし、そこではもはや、あなたがどんなに大きい声を出して呼んでも、あの助言者である先生も来てくださらないし、やさしく励ましてくれた友人も答えてはくれないうでしょう。その上、ある朝突然あなたは目前にコンクリートの壁が立ちふさがっているのを見るかもわかりませんし、足下の棘があなたの足を刺しているのに気付くかもわかりません。もう一歩も前進できないと、その時あなたは死を覚悟するかもわかりません。けれどもどうぞ、その時パスカルの言葉を思い出してください。「人間は自然のうちで最も弱い一茎の葦にすぎない。しかし、それは考える葦である。」考えるということは、人間に与えられた特権です。考えた上にも考えてください。その中であなたは同志社で得て来たなものかを思い出されるかもわかりません。それは形あるものとしては

なく、何となく空気のようなものとして……。見えないけれども必要な……。(同志社精神とは、そのようなものではないでしょうか。私は感がにぶいので、この年になってやっと今頃それを感じて、感謝することがあります。)

熟慮のあとは、バートランド・ラッセルに見習ってください。彼は九十七歳の死の日まで世界平和のために情熱を燃やしつつ、もうろくせずに働らきつづけました。熟慮と情熱、この二つがあれば、きっとあなたはコンクリートの壁に脱け穴を見出し、棘に刺された足の痛みも忘れるでしょう。

おめでとただけ申しあげるつもりが、つい何だか口はばったいことを言ってしまった。ごめんなさいね。老婆心というものは、困ったものです。

まず健康には、くれぐれも注意してくださいね。

(大正十四普卒・同志社評議員)

「誠実であれ」

千 宗 室

毎年三月になると卒業生におくることを書いてほしいという依頼が、あちらこちらの学園からあります。私はその都度、「誠実であれかし」という言葉を贈るのです。

「人間にとって一番大事なものは何だろうか？」と問われれば、その人なりのさまざまな答が出るでしょう。そして、それは自分大事という根本的な考えが中心になっていることは申すまで

もありません。自分ほど大事なものは無いということを否定するのは誰にもできないことです。学園に学生として通っている間は、自己中心にその大事なことを考え、また、それを行動にあらわすことも可愛気があると許容されていることは確かです。然し学園を卒業、社会人としての一步をふみ出したその瞬間から、自己中心という大事さの根本は別としても、「相手を知る」ことへの拡大を、意識的にもたなければなりません。それは別に見えすいた妥協ではなく、社会という体制の中にある自分と相手とを、絶えず考えて生きてゆかねばならない、現実に対する在り方を認めるということであります。そこには必然的に「誠実」という、人間関係を最も深くつなぎとめる心の働らきが生まれ、それを持つことの意義が存在するのであります。誠実ということは、真の心といえるでしょう。その真の心とは、それは素直さということに置き換えられるのです。もちろん、人間の心にはすべて素直さがあるのです。唯、それが横を向いたり、上を向いてしまったり、下の方にいってしまったりして、なかなか自分でもつかむことはできません。しかし、相手を見つめてあげ、相手を知る様に努力し、そして自分一人で生きているのではなく、大勢の人と共に生きている、その日々感謝し、手を合わせあっていくのだと思うことはできることです。これができることによって良き社会人としての今日が、明日が、将来があるのです。社会は厳しく、そして日々が努力であります。いつも自分が誠実と努力をもつことによって、自分の目の前が開いていくのであります。なげやりに物事をやったり、要領よくやっていたりしても、それは決して

将来のためにはならないので、どんなことに対しても自分のベ-スをよく考えて、それに合わせてやっていくべきであります。茶道の精神は和敬清寂といい、どんな場合でも相互に和しい、敬いあい、清らかな心をもって明日に対する今の腹ごしらえ、すなわち「不動心」をつくることであります。こうした精神をもつことによって、心のゆとりが出てくるでしょうし、また、それがいろいろな働らきをしてくれるのです。

どうか卒業される皆さんが社会において、誠実と努力とをもって進まれるようにと心から念じ、今後の御活躍を期待しております。
(昭和二十一大経卒・同志社評議員、裏千家家元)

